

Fate/The Devote Romance

閃く陳宮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある時代、とある場所で開催された第N次聖杯戦争に、綾城家第187第当主、綾城由希も参加することとなる。

以下、本聖杯戦争規約。

通常の聖杯戦争とは大きく異なるため、よく注意して読んでいただけると幸いです。

本聖杯戦争は、ランダムに7人の魔術師（マスター）が、セイバー・ランサー・アーチャー・キャスター・ライダー・アサシン・バーサーカーのサーヴァントを一体ずつ召喚し、行われる。

召喚されるサーヴァント及びサーヴァントのクラスはランダムであり、参加者である

魔術師及びサーヴァントが故意的に選ぶことは出来ない。

本聖杯戦争では、魔術師（マスター）全員がサーヴァントを召喚しなくとも、D H J Z年F月R日00：00をむかえた瞬間に開始されるものとする。

本聖杯戦争では公平性を期すため、魔術師一人につき、ルーラーというクラスのサーヴァターを配属する。以下、呼び方はクラスであるルーラーで統一する。

本聖杯戦争において、聖杯の力をそのまま行使することは極めて危険であり、聖杯の暴走を引き起こす危険性があるため、勝利した魔術師（マスター）のルーラーに一時的に聖杯の力を与えることによって、暴走を予防し、ルーラーによって魔術師（マスター）とサーヴァントの願いを一つだけ叶えるものとする。

目次

4話	3話	2話	1話	0話
望み	無題	覚悟	非日常	出会い
29	22	15	7	1

0話 出会い

とある夜。

ある夢を見た。

どんな夢だったか？ よく覚えていない。よく覚えていないけど、良くない夢だった。

悪夢だったか？ 悪夢だったかもしれないし、悪夢じゃなかったかもしれない。暗く重い雰囲気ではあったが、悪い気はしなかった。

どんな感情を抱いたか？ どうだろうか……。悲しかったかもしれない。辛かったかもしれない。楽しみだったかもしれない。嬉しかったかもしれない。よく覚えていない。いろんな感情が一齐に押し寄せるような夢だった。気もする。

少しでも覚えてることはないか？ 少しだけ覚えてるのは、戦争がどうかというのを覚えてる。なんとも物騒な夢だと思う。

もう朝だ。

顔を洗って、朝食を食べ、歯を磨き、大学に行って、適当に授業を受けて、遅くまで友達と遊んで、電車に乗って、中で少し寝ちゃって、駅に着いたのは00:03頃だった。

た。どうしてか辺りに人の姿はなかった。秋斎（あきせ）という、そこそこ大きな街なのだから、帰りのサラリーマンとかそういうのがいてもおかしくはないけど、誰もいなかった。

「お前、余裕ぶってんな」

後ろから声が聞こえた。男の人の声だ。

「あなたは……？」

見覚えのない男だった。歳は17くらいだろうか？ どう見ても歳下の男だった。

「ふん。冥土の土産に俺の名前を持っていくつもりか。悪くは無土産だろうが、渡してやる義理もない」

何を言っているのかわからなかった。変な人に絡まれちゃったな……。そう思いながら踵を返す。

「やれ。アサシン」

あのくらしいの年頃にはよくある事なんだろうと思いつつも帰りを急ぐ。ああいう輩に絡まれるのは慣れてない。

「早速、仕事かね……。私はそんなにやる気では無いのだけれど魔術師マスタくん」

どこにいたのか分からないけど、いつの間にか背の高いスーツの上に黒を基調とした薄いロングコートと黒い中折ハットを被った細身の男が居た。

「いいからやるんだ！ 俺はこの聖杯戦争を必ず勝たなければならないんだ！」

聖杯戦争……？ そういえばどこかで聞いたことがある気がする……。

「サーヴァントとはつくづく嫌な生き物だね。誰かに縛られることを嫌った私が、死後も誰かに縛られるだなんて。全く以て人生とはどうにもならない悲劇によく似ているものだね」

「お前はその哲学者ぶるような口を閉じられはしないのか！」

なんだかよく分からないけど今のうちに逃げよう。なんか嫌な予感がするし、聖杯戦争という言葉がどうにも引つかかる。

「こればかりは性分だから仕方ないね……。つてあれ？ いないね」

「目の前から居なくなっても、お前なら追えるだろう。確実にここで一人殺せ」

「まだ聖杯戦争は始まったばかり。様子見するのがいいと思うけどね。私は」

「俺には急がねばならん理由があるんだ。早く行け」

「はいはい。それじゃあ、少しだけ、待っててね」

走る。走る。

誰もいない夜道をただひたすらに。

さっきの変な男たちはもう居ないし、少しだけ休もう。

「はあ……疲れた」

声が被った。

横を見るとさつき、アサシンとか呼ばれていた細身の男が居た。

「こんばんわ。早速だけど、あなたを殺さなければいけないんです。そうだね。方法は……”刺す”かな」

そう言うとアサシンは懐から小さなナイフを取り出す。

「助けて……!!」

咄嗟にそう叫んだ。誰もいない夜の中。その声だけがこだまする。

「ふむ……。あなたが私の魔術師マスタですか？」

気づくと、目の前には重そうな白を基調とした浴衣に、紫がかった長髪の男がいた。

「マス……?」

「かなり動揺しているご様子ですな」

長髪の男はいつの間にか散らばっていた教科書を見る。今日は中国語の授業しか教科書を使わないから、それしかない。

「ふむ。状況を見る限りはあなたが私の魔術師マスタで間違いはないでしょうな」

状況が理解できない。できないけど今はこの人に頼るしかない。ただ継るような目で目の前の長髪の男を見る。

「おや……。これは困ったね……。私、暗殺なら得意なんだけど、戦闘となると、ちよつと

ね。引き返してもいいけど、君が帰してくれるつもりはなさそうだね」

「無論ですとも。たった今から、かのお方は私の魔術師^{マスタ}。であれば、かかる火の粉は振り払うしかありませんまい」

長髪の男は浴衣の懐から短刀を二つ取り出すと同時に、アサシンに斬りかかった。

その身のこなしは軽く鋭く、舞っているようだった。時折、街頭に照らされて輝く刃は妖艶な姿を演出していた。

アサシンも軽やかに避けていく。それは太刀筋が見えてるかのようだった。

「つと……。いやあ、これは案外と追い詰められてしまったね」

五歩ほど後ろに退るとアサシンは余裕ぶった口調で言った。それに長髪の男は苛立ちを隠しきれずに答える。

「ふむ。こちらが押していたというより、遊ばれていたという感じで不愉快ですな」

それを聞くとアサシンは揚げ足を取る子供のようになり、おちやらけた様子で話す。

「遊んでいたつもりはないけどね。でも、そうだね。遊んでしまうのは私の性分だから、そのつもりがなくてもそうだったのかもしれない」

「あなた、生前は多くの方に嫌われませんでしたか？」

「そうだね。苦難の多い人生ではあったかな。それでは、そろそろ私は戻るよ」

そう言うアサシンは背を向け、ゆっくりと歩いて駅へと向かっていった。

完全に姿が消えてから、長髪の男に早口でお礼を言った。

「あ、ありがとうございます！ その、なんとお礼を言ったらいいか……」

「礼には及びませぬ。私はサーヴァントとして当然のことをしたまです故。しかし、あの男を殺せなんだのは口惜しいですな」

「その……サーヴァントとかマスターとかってなんですか……？」

やり合う前に気になっていた言葉を長髪の男に聞いた。何か知ってそうな口ぶりだし、というか完全に当事者だし。

「おや……もしかして聞いたことはありませんか？」

眉を上げ、驚いた様子で聞いてきた。普通に暮らしていたらそんな言葉を聞くことはゲームや漫画の中でしかない。聞き返されたことに、動揺しながら、答える。

「え……あ、はい」

少し、考えると、長髪の男は指をパチンと鳴らし、こう言ってきた。

「そうですね……。少し話が長くなりますので、家にお邪魔してもよろしいですか？」
なんでこんな不審者みたいな人を一人暮らしの家に上げなければならぬのだろうか……。と思いつつ、命の恩人のため家に上げることにした。

1話 非日常

唐突に上がり込んできた男はキャスターと呼んで欲しいらしい。何やらほかに名はあるのだがその名前が知られると良くないとか。

そのキャスターと名乗る男から聖杯戦争というものについて教えてもらった。なんでも歴史上の人物等を召喚して戦って勝つと願いが叶うとか。

なんとも突拍子もない話だが、妙にすんと落ちた。

「しかし、今回の聖杯戦争は妙なところがある」

「誰!？」

妙に渋い声が出た。キャスターの声ではない。

「……子供？」

「通常、聖杯戦争にはルーラーは一人しか存在しない。というより一人しか存在してはならない上に、誰かに属するなど以ての外だが、そのどちらかが満たされている」

いや、確かに大人……しかもかなり渋い声が聞こえたのにも関わらず目の前にいるのは子供だ……。

「まあ、なんでも構わんが、マスター」

「はい！」

「俺はルーラーだが、最低限の仕事しかせんから過度な期待はよしてもらおう。ゆめゆめ忘れるなよ」

そう言うのとルーラーは奥の部屋へと向かっていった。そこは物置小屋みたいな感じでほぼ使っていないから自由にしてもらっていいけど、我が家同様に歩き回るのはどうなんだろうか？

それと、声だけど、それはそういうことなのだとなんと納得しよう。一日の情報量が多すぎる。

「ふむ。魔術師殿。^{マスター}ひとまず、休息をとりましょう。聖杯戦争は始まったばかり。最初はあまり目立たず他を争わせるのです」

「そうだね……。寝ようかって言っても布団とか無いけど……」

「いえ、私たちは結構。サーヴァントに休みは必要ありません故」

「そうなんだ。じゃあ寝るね」

サーヴァントというのはよく分からないけど、寝床が必要ないならありがたい。

自分一人だけリビングのソファで毛布だけを掛けて寝る。一人暮らしの学生のソファはベッド、これ常識だね。ここに男も女も違いはないと思う。みんなソファ―ベッド説。

一夜明け、朝を迎えた。キッチンから香ばしい、美味しそうな匂いが漂っていた。キッチンを見るとキヤスターが何かを作っている。

昨日のことを思い出すと、現実とは思えないほど、突拍子もないことの連続だったが、どうやら夢とかじゃなかったらしい。

それなら、と気になっていたことを聞くことにした。

「キヤスター」

なんかキヤスターって呼ぶの恥ずかしいな。

「おはようございます。魔術師殿。いかがされたのですかな？」

魔術師殿マスターって呼ばれるのも恥ずかしいな。

キヤスターは、なんとも美味しそうなフレンチトーストをテーブルに出す。

それを食べながら気になっていたことを聞いた。

「そういえば昨日の夜から人の姿を全く見てないんだけど、それも聖杯戦争？　ついでうのに関係あるの？」

キヤスターはコツコツと額の横を右人差し指で叩きながら考えて、答えた。

「分かりませぬが、そう考えて間違いはなさそうですね。今回は昨日のルーラー殿が仰っていたように大変イレギュラーな聖杯戦争でございますれば、前例にないこともござりましょう」

「イレギュラーね……」

今回が初めてのそれだから、レギュラーもイレギュラーも分からないけど、とりあえず、今、目の前に起きている事象から解決すべきだ。物事とはそうして成すべきを成せば自ずと良い方向へと働く。

つまり、大学へ行こう。聖杯戦争だのなんだのとよく分からないことで単位は落とせない。

「おや、どこに行かれるので？」

「大学」

「ふむ。いかなる場面でも学ぶことに意欲的とは……喜ばしいことですな」

別に意欲的って訳でもないんだけどね。というか意欲的な人とかいるのかな……。と思いつながら、愛想笑いをして外を出る。

外に出ると人はいない。それでも今の時代はなんでもIT化が進んでいるから無人でも改札は抜けられるけど、人がいないというのは少し怖い。

ホームに着いてから10分ほどが経った。

「あれ……？ 電来ない」

いつもは10:24に到着してるのに、おかしい。

「ふむ。夜だからという訳ではありませんな」

後ろからキャスタアの声が聞こえた。驚いて振り向くと、そこにはやっぱりキャスタアの姿があった。

「なんでいるの？」

「あなたは私の魔術師殿^{マスター}。であれば、いつでも付き従うが道理にございましょう」

「はあ……」

友達に状況を聞こうとスマホを開いて、電話をかける。

「……出ない……」

ほかの友達にも電話をかけてみる。やはり出ない。

「ふむ。聖杯戦争の影響とみて、間違いはありますまい」

「そんなこと言われてもなあ」

自分以外の人間が急にパターンといなくなるのはどんな理屈を以て説明されても納得できないし理解できない。

いや、そういうえば昨日いたけど、一人？ 二人？ くらい。

「見つけました！ あの方ですね？ ルーラー！」

「ええ。そうですね」

もう三人いた。

一人はルーラーと呼ばれていて、明らかに聖杯戦争絡みだ。

「なんのご用ですか？ 潰しに来たのなら返り討ちにさせていただきますが」

キャスターがなんか好戦的なことを言うと、なんかおつとりとした感じの女性が穏やかな笑顔で言う。

「潰しに……なんて、物騒な話ではないわ。私たちと、協力関係になつていただきたいの」

協力関係……？ 昨日聞いた限りでは聖杯戦争の勝者は一人だけ……。となると一時的な協力になるけど、まだ始まったばかりって言つてたし、情報量も少ないはずなのに、協力しようだなんて少しおかしい。

それに、これはただの直感だけど、嫌な予感が漂つて仕方がない……。いや、直感というよりもっと明確な何か、記憶にも似た何かが脳裏がよぎつた。

「どうする……」

ここは聖杯戦争に少しでも詳しいキャスターに話を聞くことにした。

「……ふむ。まあ、よろしいでしょう」

「やったー！ これからよろしくお願いしますー！」

横の小柄な子がびよんぴよんという擬音がつきそうなほど喜んでいた。

「それでは、同盟も結べたことですし、今日の夕方の6時頃に、そのカフェでまたお会いしましょうっ！」

そのカフェとは、駅の近くにある近田珈琲店のことだ。いや、場所とかはどうでもよくて、それよりも、何か得体の知れない猜疑心が心から離れない。本当に行つてしまつてもいいのだろうか？

「え……？ ああつと……」

言い淀んでいるとキヤスターが代わりに答える。

「承りました」

「そう。嬉しいわ」

柔和な笑顔を浮かべる彼女にはどこか強い目をしていた気がする。

「それでは、今日の目標は既に終えたので速やかに戻りましょう。あのアサシンの目に止まれば厄介です」

そして次は、険しい表情をしていた。

「むっ！ マスターは私がお守りするので心配には及びませんよ！」

それを察してかどうかは分からないけど、ランサーがその懸念を吹き飛ばすような元気で言い放つた。それに呼応するかのよう

「そうね。ランサーがいてくれるのは心強いわ。でも、気を逸つてしまつてはだめよ」

「むむむ……それもそうですね……」

彼女は自分たち方に振り返つてまたも柔らかな笑顔を浮かべながら

「では、またね」

と言い、駅を去った。

「では、我々も一度戻りましょう魔術師殿^{マスター}」

いくら待っても電車は来ない。その事は日常が非日常に変わったことを明確に示していた。

「そうだね。戻ろう」

キャスターと家に戻る。

2話 覚悟

駅から10分ほどして玄関を開ける。あの口ぶりから昨日の男にあの方たちも狙われてるみたいだった。

「キャスター……本当に良かったの？」

それはもちろん、協力すると約束したことだ。未だに確信じみた不安がずっと頭を巡っている。

「確かに怪しくはありますな。情報量が少なく、まだ戦力差もわからない中での協力関係の申し出……。何か裏があると見て間違いはありませんまい」

「それなら、危ない橋は渡らない方がいいんじゃないか……」

キャスターも同じような懸念を抱えていた。

「それも一理ありますが、先に申ししたように情報量が少なすぎます。故に相手の懐に入り込むことも肝要でしょう」

確かに一理ある。情報がないなら足で稼ぐしかない。それでも、やっぱり、何かが自分の思考をマイナスへと引っ張っていく。

「なんだ。もう帰ったのか。朝にせつせと出ていったから何事かと思ったが、一時間も

しない内に帰宅とは」

「電車が来なくてね」

「そうか」

と、ルーラーは一息置いて言葉を続けた。

「とうか、マスター。ここの電波環境はどうなってる！」

「どうって……？」

「ここは割と都心部だし、インターネット環境が悪いってことは無いはずだけど。

「どうも何もインターネットにアクセスできないでは無いではないか！」

「そんなこと言われてもなあ……」

「ルーラー殿。そのインターネットとやらよりも、ルーラーとしての職務を全うして頂

けませぬか？」

「今、俺に仕事をしろと言ったのか？」

さつき会った方のルーラーとは大違いな発言だ……。かたや献策までしてくれて、か

たや家でゴロゴロ。平等ってなんだろう。

「ええ。もちろんですとも」

キャスターとルーラーがバチバチしている。確かに性格的に合わなさそうだな……。

「まあまあ！ そうだ。ルーラー。この段階で誰かと同盟を結ぶのってアリ？」

「ここは少しでも仕事を上げてキャスターとルーラーの仲を取り持とう！」

「無しだ。そもそも人間など信用出来ん」

「まだ悩んでおられたのですか。信用出来ぬことは賛成致しますが、しかし、いいですか？ 懐に飛び込み虚を突くが、最善かと」

「何を言ってる。それでこちらが痛手を負えば滑稽本のネタにもならんぞ。そもそもマスターは誰かを出し抜けるタイプでもないだろうに」

「そこを支えるのが私でありルーラー殿の役割と存じます」

しばらく言い合いが続く。逆効果だったかなと思いつつ。しばらく黙ってダラダラしていると、いつの間にか時計は5時半を指し、近田珈琲店へと向かい始める時間となった。

「もう時間だね。いってくるね。ルーラー」

「必ずや敵の虚を突き、私が正しかったと言わせてやります」

「そうか。せいぜい死ぬなよ、マスター。俺は今が結構気に入ってるんだ」

ルーラーの言った「今」にはどこかしらの哀愁を感じた気がする。そしてその一言は初日を思い出させた。初めて死を間近に感じたあの時を。それと同時に僅かな覚悟もできた。

「ありがとう」

そう一言だけ言って、ドアを開けた。

程なくして近田珈琲店に到着した。中には店員らしい人がいないせいも妙に静かで張り詰めた雰囲気だ。音といえば、ただ朝の三人の談笑とカップをテーブルを置いた音が聞こえるくらいで、店内は静かだ。

「すみません。待たせてしまいました」

すぐにテーブルまで行き、椅子に腰をかける。

「私たちも今来たところよ」

朝の時のような笑顔が緊張感を和らげる様だった。

「そうだ。飲み物は何がいいかしら？」

「え？ えつと……大丈夫です」

そう言うランサーがふんすと息を鳴らしながらまくし立てる。

「なんともつたいない……！ このココアはすごく美味しいですよ！」

「ふむ。では、後で頂くと致しましょう。今はまだ、あなた方を信用してはおりませぬので」

キャスターがキツパリと断り、ランサーはそれにしゅんとしてしまった。このキャスターはあれだ。世渡りはできないタイプだ。

「それは当然です。信頼されるよう務めましょうランサー」

ランサーは一転変わってぱっとした笑顔を見せた。

「ルーラーの言う通りですね！ このランサー！ 信頼を勝ち取ってみせます！」

このランサーは扱いやすいタイプなんだろう。

「ありがとう、ランサー」

「信頼関係を築くには名前くらい言わないとね。私は秋風あきかぜ薫よ。薫さんと呼んでくれると嬉しいわ」

「綾城あやしろ由希です。呼び方は綾城とか由希とか好きな風に……」

「そう。では、由希さんでいいかしら？」

いきなり下の名前は少し変な感じがするけど、悪くない。

「はい！ では、それでよろしくお願いします！ 秋風さん」

「薫さんでいいのよ。それで話なのだけれど、目下の目標はアサシンの撃破にしたいの」
アサシンと言うと初日に襲ってきたあの男たちだ。確かにあれを除くのは賛成だ。他のサーヴァントを見てないから戦力の程は分からないけど、あれは見境なく襲ってくるタイプだ、初日にあんなフルスロットルとか考えられない。

そんな訳の分からない横槍に首を取られるのは笑えない。

「そうですね。いいと思います。具体的には……う？」

「それに関してだけけれど策を練るには情報が少なすぎるの」

確かにそうだ。まだ二日目。何も分からないのが当たり前だ。

「ふむ。そうですね。真名も宝具も分からぬ段階で策を講じるのは無理がありますな」
キャスターも名案は浮かばないようだった。ここで話が詰まるかと思ったらランサーが口を開く。

「やはり正面衝突ですよ！ マスター！」

ルーラーがさかさず止める。

「それは愚策です。勝てたとしても、後の戦いに響きます」

「ではどうすれば良いのでしょうか……」

キャスターがメガネを拭きながら立案する。

「とりあえずは、相手を引き付け情報を引きずり出すが上策かと存じます」

「そうね。……えっと」

「キャスター。とお呼びください」

「キャスターの言う通りだと、私は思うわ。あなたは？」

極めて当たり前だった。リスクではあるが、この際は仕方ない。

「いいと思います」

「私も同意です。それが無難な判断です。ランサーは異存はありませんか？」

「はい！ この不肖ランサー！ アサシンを引き付けます！」

ランサーはかなりやる気を出している。ずっとその気合いで最後まで持つのか少し心配でもある。

「それでは——」

ドアが開いた音が鳴る。一齐にドアの方へと視線を向けると、アサシンがいた。

「今晚は。君にさようならを言いに来たよ」

「させません！ マスター！ ルーラー！ 後ろにさがってくださいー！」

「ええ。おねがい。ランサー」

月夜に照らされたアサシンは顔が良く見えない。ただ、不気味な雰囲気醸し出ししながら、こちらへと不用心に近づいてくる。それは、一歩一歩ゆっくりと。

「魔術師殿。我々は、背後を警戒致しましょう」

「そうだね……」

アサシンの足音が近づいてくる。妙な緊迫感がこの場を支配する。昨日はあれほどの威圧感を感じなかった。いや。そうではない。威圧感や何か気を発しているのではない。何も無い。気配も気力も、生気も、何も。

目の前のアサシンは、ただ亡霊のように歩んでいる。

3話 無題

月夜から亡霊のようなアサシンが目の前からゆっくりと近づいてくる。その足音が近づく度に緊張感が高まっていく。

「気は乗らないのだがね……。それでもやらないと怒られてしまうから、始めよう。まずはランサー、君を殺す」

「やれるものならー！」

一瞬、アサシンは地を蹴り猛スピードで向かってくる。

戦闘が始まると、キャスターは玉を渡して、「いざとなればこれを相手の顔に投げるように」と耳打ちをしてきた。

速すぎるアサシンだが、ランサーに動揺は見えなかった。

「あなたの速さには慣れましたー！」

その速さを見越して、ランサーは大盾をアサシンにぶつける。アサシンは身をかわり、大盾に吹き飛ばされることは無かったが、距離を取らざるを得なかった。

ランサーはその好機を見逃さなかった。ただ鬼気を纏った獅子のようにアサシンに對して迫りながらその体に似合わぬ巨体な槍を振るう。

「ランサー、そこまで無理に攻めなくていいわ。今は守りに専念してちょうだい」
「むっ……。分かりました……」

その性分から攻めるのが得意なのか、少し不満げだったが、さっと秋風さんの元へと戻る。

「ランサーが離れてくれればと思ったが、そうもいかないようだね」

「^{マスター}魔術師殿。なぜアサシンは今、我々を狙うのでしょうか」

確かにそうだ。今は二対一。アサシンが不利だ。それを覆す何かを持っているのか？ 或いはマスターとは別行動を取っていて、違う目的があるのか。

「どうしてだろう」

「キャスターの疑問は正しいです。現に私たちはあのアサシンに対抗すべく共にいるのですから。そして、それが分からぬマスターとアサシンではないでしょう」

不利を推してでも急がなければならない理由があるのだろうか。

「そうね……。ルーラーの言う通りだわ。何か狙いがあると見て間違いなさそうね」

「狙いなんて、有りはしないよ。君の首以外にね」

アサシンは再度、近づくとつともない速さで。

「なんの！ このランサー！ 絶対にあなたを通しません！」

「二度も突進などしないよ」

アサシンは、テーブルの上に上り、高くジャンプした。空中から秋風を狙うつもりだ。
「キャストター！」

「承知」

キャストターは矢を放つが、一矢はナイフで弾かれてしまう。さらに射掛けるがその矢はナイフから先には届かない。

「もらった」

「^{キャストター}魔術師殿！」

「分かった！」

早速玉を投げつけるが、それもナイフで切られてしまう。そして次の瞬間、煙が辺りに充滿した。それは、煙玉だった。

「甘いね」

煙の中からナイフが三本飛んできた。その三本は確実にランサーとキャストターと秋風を貫こうとしていた。

「キャストター！」

秋風さんはランサーが槍でナイフを打ち上げたため、無傷だったが、ランサー自身は肩を負傷した。キャストターも自分が後ろにいたため、避けずに血を出しながら握りとつていた。

「アサシン。話が違うだろう」

「おや？ マスター。登場にはまだ早い気がするが、いいのかな」

背後からアサシンのマスターが現れた。いつから居たのか全く検討はつかない。キャスターと一緒に後ろを警戒していたはずなのに。

それに話とはなんだろうか。

「……………月……………」

「……………」

険しい顔をした秋風さんに、無表情の月と呼ばれたアサシンのマスターは妙な雰囲気だった。

「退くぞアサシン」

「いいのかい？」

「そもそも、二対一では厄介だ。それにあの小兵、既に傷が完治している。どういう訳か知らんが、厄介なのに間違いはない」

ランサーの肩の傷は確かに既に塞がっていた。キャスターの掌は未だに血が流れている。

「待ちなさい」

秋風さんの声だった。いつもとは違うハリのある凛とした声で月を呼び止めた。

「待ちなどしない。帰るぞアサシン」

月はとつとと帰っていつてしまった。

追撃はしようと思えばできるはずだが、行った先に罠がないとも限らない。

「嵐のよう……でしたな」

「そうですね。英霊としての強さは並程度でしょうが、前触れもなく現れ、前触れもなく去る上に理知的な戦い方をするので面倒です」

まさにその通りだ。時間にしておよそ五分もない。もしかしたら三分も無いかもしれない。そのくらいの速さだった。それほど短い時間だったが確かに死の恐怖を感じた。

「それを退けられたのはランサーのおかげよ」

「ありがとうございます！ マスター！ しかし、討ち取るには至りませんでした……」

「気を落とす必要は無いわ」

とりあえず一段落はついた。アサシンが急襲してきた時はどうしようかと思つたが、終わつてしまえばあつさりだった。

「今日はもう解散しませんか？」

自分がそう提案すると、ルーラーが反論を述べた。

「いえ、ここは一夜だけでも共に行動することを提案します。近くにアサシンがない

とも限りません」

至極真つ当だ。あのアサシンが退いた理由は数だった。ここで個々で動けばどちらかが襲撃される可能性は高い。とても正しい意見なはずなのだが、どうにも拭いきれない不安感が心を襲って仕方がない。

「あのアサシンも……撤退すると言ってたので……今は一時解散でいいかと……」

直感的に言った。論拠はない。いや、あつたが論拠になつてない。相手が撤退すると言つたからこつちは気を弛めていい。そんな理屈は理屈にならない。

「魔術師殿……。分かりました、私は魔術師殿に従いまする」

キャスターは不服だけど一応はこれに従つてくれるそうだ。

「うーん……。なるべく一緒にいたけれど……」

秋風さんは思案している。重点的に狙われているのは秋風さんだった。なら秋風さんからすれば、自身が狙われる可能性が高い内は一緒に行動したいはずだ。例えどれだけこちらが戦力として不足していても。

「私だけでは不安ですか？ マスター」

「そうではないわ、ランサー。あなたがいてくれるのは心強いけれど、それはあなたに戦いを強いていい理由にはならないもの」

「確かにランサーは強いです。あのアサシンと正面からやり合えば、まず勝てるでしょ

う。しかし、油断してはなりません。それに敵はアシンンだけではありません。セイバーやアーチャーにライダー、バーサーカーとまだまだ多くいます。別行動は絶対に控えるべきです」

ルーラーは理路整然と語る。

「そうね……。でも、由希さんが乗り気じゃないみたいだから、無理強いはできないわ」「……そうですか。分かりました」

もちろん納得などいつてないだろう。それはそうだ。言い分であれば圧倒的にルーラーが正しい。それでもこちらの意見を通せたのは、まだ信頼関係を結べていないからだ。良きにしろ悪しきにしろ、信頼関係を結ぶには相手を受容しなければならぬ。

今日から三日ほど情報を集め、四日後の昼にアシンンの対策を考えるために集まることを約束してから、近田珈琲店を後にして、各自の自宅へと戻る。

自宅へと戻ると、ルーラーがコーヒーを淹れてくれた。

喫茶店に行くと言ったというのに、コーヒーをチョイスするなんて……とも思ったが、これは彼なりのねぎらいなのかもしれないと思うと、少しだけ甘く感じた。

4話 望み

疲れてどたんど寝ていたからか、朝は随分と心地よく起きられた。

「そういえば昨日はどいつと同盟を結んだんだ」

物置部屋からルーラーがだらだらと歩きながら聞いてくる。

「ほう。ルーラー殿もいよいよ仕事ですか？ マスター、今日明日には大洪水ですよ」

「一応、聞いておくだけだ」

相変わらず仲が悪そうだ。

「ランサーの子とだよ」

「そうか……。対面した時、何かを感じたか？ なんでもいい」

妙なことを聞いてくる。秋風さんたちに証拠のない確信ある疑いを持っていることを見透かされてるかのようだった。

「そうだね……。何か変に恐怖心というか何か疑い……。みたいなの？ よく分からないけど」

「そうか。それなら、良かった」

「良かった？」

良かった。というのも普通のニュアンスではなかった。ルーラーには心底からの安心が見られた。いや、見られたというより感じられた。表情や声のトーンは一切変わってないのに何故かそう感じた。

「ああ。変に懐柔されていなくて安心したということだ」

「私がいる限りは懐柔なぞされませぬ」

キャスターはまた何かを作りながら会話に参加してくる。今日の朝ご飯は……回鍋肉らしい。

え？ 朝から？

「まあ、お前のそこらに関しては信頼しているが、マスターが別に危機感を持つのはそれで重要だ」

「ふむ。一理ありますな」

そこでは意見が一致しているらしい。そんなに危機感なさそうですか？

「まあ、なんにせよ一先ずは安心だ。そこで。マスター、お前はランサーのマスターを懐柔できるか？」

「自分が……？？」

「確かに相手を懐柔できれば素晴らしいですが、それより殺してしまう方が早いのでは？」

キャスターは何かとつけて物騒なのをやめて方がいいと思う。

「……どこに利用価値があるかは分からん。最悪の場合、罠として使える。生かしておいて良いだろう」

ルーラーも殺しに関しては反対らしい。良かった！

でも、罠としては使うかもしれないらしい。見殺しにするならあんまり変わらない気がしてならない。これが平和ボケなのかな……。いや、人の命を駒として見る時点でアウトなんじゃ。まあ、ともかくそういうことはしたくない。

「殺したり罠にしたりっていうのは……」

「……そうだな……さっきの言葉は忘れろ」

何かを思い出したかのようにルーラーは言葉を返す。そして、また物置部屋にカップ麺を持ちながら帰っていった。

「ふむ。あのルーラー殿にも思うところはあるのですかな。さて、それでは行きましょう」

キャスターは、自分が朝には少し重い回鍋肉を食べ終わるのを見るとさつと腰を上げた。

「行くつてどこに？」

「今はとりあえずアサシン殿は二の次として他のサーヴァントを探しましょう」

「え？ あ、ちよつと……待つて！」

自分たちの第一の目的はアサシンの撃退だったはずなのに、二の次つてのはどういふことだろう。

そんなことをぼんやり考えながら外を歩く。

「さて、魔術師殿。一つ質問がございます」

「質問？」

「私はマスターから魔力を供給して頂き、現界しているのですが、魔力を流しているという実感はございませんか？」

「魔力を流す……？」

確かに説明には受けてたけど、いざ実感があるかと聞かれると、正直のところ無い。流しているという感覚も、流れているという感覚も。

「ふむ。実感がなければそれで結構。マスターにはもう一人、サーヴァントと契約して頂きたく存じます」

「もう一人……？」

「ええ。そのために、これから二日以内にマスターを一人聖杯戦争から脱落させる。或いは、私が召喚しマスターと契約させます」

「そんなこと出来るの……？」

「ええ。ではまずは、そうですね。最優のセイバー、もしくはバーサーカーあたりを目指して頑張りましょうぞ！」

妙に張り切ってキヤスターはさっさと歩いてしまう。何が彼をそんなにやる気にさせているのか分からないけど、やる気がないよりいいことだ。

「さて……この辺でいいでしょう」

「何が？」

場所は開けた公園だ。公演と言っても遊具はブランコと滑り台くらいで後は原っぱが生い茂ってる、半ば空き地のようなものだ。

「陣地を作成致します。ここで構えておけばいずれどなたか釣れるでしょう」

「そう上手くいくもの？」

魔力を辿って誰かが釣れるだろうという算段らしいが、上手くいくのだろうか。割とガバガバなのでは？

「とは限りませんが、実行せねば始まりませんまい」

それは確かにと思いながら、適当にブランコに座っている。ブランコに座っていると何となくそよ風が気持ちいい気分になる。

そんなことを考えながらぼーっとキヤスターを見る。

地面から青白い光が浮かび、みるみるうちに柵とか、櫓とかができていく。

「これは……凄いな……」

「私の生前の時代の野営を思い出して作ってみました。俵物庫や武器庫などが、それはまあ飾りですな。障害物になれば良いくらいの考えで良いでしょう」

「なるほどね」

キャスターってガチガチの軍人だったんだ……。てつきり、文化人とかかと思つた。

「時に魔術師殿」

「ん？ どうしたの？」

「魔術師殿の望みとは何なのかと。ふと気になったのですが、教えていただいても？」

「望み……？」

望み。と言われると特に思い浮かばない。食事には困つてないし、お金や住む場所にも。もちろん、お金はもつとあつたらそれはそれでいいし、家ももつと広かつたらそれはそれでいい。でも、望みにすることの程じゃない。

世界平和とかを願う器でもない。

なんというか、平凡だなと感じる。何かを望み始めたら何もかもを望む。何も望まなければ何もかもを望まない。

文字にするとなんだか難しいけど、人間とはそんなものだと思う。ただ、毎日が同じ

ように続けばいい。ただそれだけの簡単なことだけが望みと言えば望みかもしれない。

「ええ。聖杯に選ばれるということは何かしらの望みがおありでしょうか？」

しばらく考えてみると、やっぱり何も無い。

「……………うーん……………ないかな」

「……………そうですか……………ふむ。まあ、今はそれで良いでしょう。また機を見て聞くとします」

キャスターは何かあるのだろうか？ 望みが。

「そう言うキャスターは？ 何かあるの？」

「ええ、ございまする」

「どんな？」

「真名に関わる内容なので秘させていただきます。それよりも、マスター。一人釣れましたぞ」

信用されていないのかなと少しがっかりする。でも、そうか。真名に関わるってことは生前何かしらの無念があつたんだな。

英霊に選ばれるのは色々違うと基本的には偉業を成した人らしいから、そんな人でも悔いがあると思うと、なんだか、ほっとする。

しばらくすると、一人の男が歩いてこちらへ向かってくる。その赤黒い鎧の出で立ち

からしてサーヴァントだった。

「さて。マスターを失いどうしようかと路頭に迷っていた所に魔術師マスターがいるとは。某は運がいい」

「マスターを失った？」

まだ、始まって間もないのに、もうマスターを失った……。それほど、聖杯戦争つてのは熾烈なんだな。いや、今までも見てきたし、体感してきた。アサシンに襲われる場面を。自分は運が良かっただけで、もしかしたら既に殺されてしまったのかもしれないと思うとぞつとする。

「ああ。ライダーの奇襲にやられてしまつてな。全く某も耄碌したものよ。そこで折り入って願いがあある。某と契約してはくれまいか？」

ポンポンと話が進んでいく。こんなに上手く目的を達成してしまうとは思ってもよらなかった。調子が良すぎて逆に怪しくなってくる。

「ふむ……。例えばバーサーカーであろうと矮小すぎる魔力ですので、マスターを失ったのは間違いなさそうですね」

キャスターは相手がもう脱落したサーヴァントなのは確実だと踏んでいる。

「どうするっ？」

でも、聖杯戦争で勝てるのは一組ではない。一人と一騎。脱落したマスターと再挑戦

なら分かるが、まだキャスターがいる。

「……真名は告げられますか？」

そのことはキャスターの頭も悩ませているらしい。キャスターは脱落したサーヴァントではなく、戦闘してからサーヴァントを従わせるつもりだったのだろう。でなければ、こんな割と本格的な陣は張らない。

「無論。クラスはセイバー、真名は井伊直政いいなおまさ。その証に我が古兵共揃う赤備えでもお見せしようか？」

とつととクラスと真名を明かした。

井伊直政いいなおまさ。と言うらしい。

いや、誰だ？ 聞いたことないぞ。名前に日本人だな。よし、wikiで調べるか。いや、ネット繋がらないから調べられないのか。

そんなことを考えながら、井伊直政いいなおまさと契約を進める。

井伊直政いいなおまさ……。分かった。契約しよう」

と言つても大層なこととはせず、魔力を繋げるだけだ。繋げ方が分からないけど、手をかざしたりなんか色々したら井伊直政いいなおまさは元気になったので、多分できてる。

「ふむ。存外とつとと終わってしまいましたな。しかも戦闘も無くとは……。せつかくそれなりに凝った陣地と策を用意したのですが」

「そうか。それは面目ないな。元のマスターが健在なら一戦交えたものを」

井伊直政くんももしかして武闘派？ 大丈夫？ 自分とこのサーヴァント血の気多

いの？ 鉄分取ろうね。

「でも、戦力を温存どころかノーダメージで増やせてよかったよ。キャスターの策は後で見せてよ」

ここは少しでも、無駄に戦う必要は無いアピールをしておく。

行動方針をちゃんと頭に入れて欲しい。

「そうですね。それでは二日後、披露すると致しましょう」

「二日後って言うとは……」

ちようど、秋風さんたちと会う日だ。何をする気なのかは分からないけど、数の上で有利をとつても、ランサーのあの治癒能力を見たら、単純に数で押せる相手では無いのはキャスターも分かっているはずだ。

「何をするの？ ランサーと手切れするのはまだ早いんじゃない？」

「ええ、まだ協力関係が続けます。しかし、既に手駒は揃い、後は機を見るのみでございます」

「ほう。某が来るとも限らなんだ内に策とは」

敵を知り己を知れば百戦危うからず。自分でも知ってる兵法の基本だ。

「なに、誰でもできる簡単な策です。いえ、策と言えるほどのものではありません
「い」

キャスターの考えは家で聞くことにしよう。

ということ、とつとと帰って玄関を開ける。

目の前にはルーラーがいた。そして井伊直政を見ると眉をそつと潜める。

「誰だ？　うちは広くないぞ。なのにお前、なぜまた男が一人増えてる」

おい。広くないのはルーラーが部屋一つ占領してるからつてのもあるんだよ。いや、元から狭いけどね。

「ルーラーとお見受けした。某、クラスはセイバー、真名は井伊直政と申す。此度は綾城殿を主と仰ぎ仕える所存。よろしく頼む」

井伊直政は内容を無視して話始める。武士っぽいから固めかと思つてたけど、マイペースなの？

「……井伊直政……。こつとも上手い話があるのか？　と疑いたくもなるが、まあいいだろう」

「某をお疑いなさるか」

早くもちよつとバチつてる。なんでルーラーは初対面喧嘩腰なんですか。

「そうともいうな。上手い話には必ず裏がある。そも人間なぞ嘘をついて騙してなんぼ

の生物だ」

「まあまあルーラー。こうして来てくれたわけだし、なんでも疑うつても……」
家の中の空気がどんどんピリついていく。元々、穏やかじゃないのに。

「お前のようなお人好しにはストッパーの役割も必要だろう。なあ、キャスター」
「そうですね」

お人好しってなんだよと思いつながら、キャスターの策とやらを聞いた。

果たして上手くいくのかは分からないけど、上手くハマれば確かにいい。けど、失敗したら割と痛手を負いそうな内容だった。